



看護の原点に戻って見つめる血管看護 ～Person Centered Careと浮腫看護～

2025 年 5 月 23 日 (金) 13:10～16:50

西日本総合展示場 新館 1F 第 4 会場 (C 展示場 3)

会長：渡辺直子 西九州大学看護学部看護学科 副会長：山口眞由美 広島大学病院

プログラム

1. 会長・副会長挨拶

13:10-13:15

西九州大学 看護学部看護学科 渡辺直子
広島大学病院 山口眞由美

2. 血管看護特別講演 座長

13:15-13:45 「浮腫の臨床推論」

横須賀市立総合医療センター 伊藤清恵
国際医療福祉大学 血管外科 重松邦広

13:45-14:10 「浮腫のマネジメントと看護理論～看護だから出来ること～」

西九州大学 看護学部看護学科 渡辺直子

3. 第 2 回血管看護研修コース 座長 住友病院 中山佳之

14:15-14:45 「B5 心不全緩和における浮腫看護の課題」

東京情報大学 看護学部看護学科 岡田彩子

14:50-15:20 「B4 がん性浮腫と看護の課題」

広島大学病院 山口眞由美

15:20-15:30 休憩

15:30-16:40 「ハンズオン B1 浮腫における皮下エコーの活かし方」

長崎血管外科クリニック 長田美雪

4. 閉会挨拶

16:40-16:50

第 11 回日本血管看護研究会大会長 中山佳之

ご 挨 拶

第 10 回日本血管看護研究会大会長
西九州大学看護学部看護学科 渡辺直子
第 10 回日本血管看護研究会副大会長
広島大学病院 山口眞由美

第 10 回日本血管看護研究会は、2025 年 5 月 23 日、西日本総合展示場（北九州市）にて開催させていただき運びとなりました(第 53 回日本血管外科学会学術総会合同開催)。

メインテーマは、「看護の原点に戻って見つめる血管看護～Person Centered Careと浮腫看護～」です。第 1 部特別講演では、浮腫の看護に必要な 1『浮腫の臨床推論』と題して、臨床でである浮腫の鑑別について臨床推論に則った向き合い方を、2『浮腫のマネジメントと看護理論～看護だから出来ること～』では、浮腫のメカニズムや疾患に基づく、患者の生活に寄り添ったケアについての特別講演を企画致しました。第 2 部では、「浮腫看護」をテーマとして、「心疾患」「がん」に関連した浮腫についての講習と、表在エコーによる皮下、組織の観察を行うハンズオンセミナーを企画しております。浮腫のある患者の観察、適切なアセスメントに加え、症状緩和やアドヒアランス向上について学びを深められる機会となるよう願っております。

本研究会は、「血管障害患者の療養をサポートする看護“専門職”である血管看護の技術の向上を目指す」ことを目的として 2015 年に日本血管看護研究会を設立し、活動を開始致しました。昨年より、血管看護研修コースを開講し、第 2 部は、その研修コースの受講、確認試験の受験、合格証の発行に含まれます。

本研究会の参加者は、健康や生活の課題解決を支援する看護職者、医療・福祉等の専門職者、教育研究者などです。看護学の立場から新たな価値を生み出し発信することで、臨床や地域社会の課題や困難を克服していきたいと思っております。皆様におかれましては、本研究会への参加を通じて、新たな出会いや連携の糸口のようなものが生まれまして幸いです。

最後になりましたが、本研究会を開催するにあたり、日本血管外科学会理事長、並びに第 53 回日本血管外科学会学術総会三井信介大会長をはじめ、多くの方のご理解・ご支援を賜りましたことを深謝いたします。

浮腫の臨床推論

国際医療福祉大学三田病院血管外科教授 重松邦広

血管外科の外来に紹介されてくる浮腫の患者さんは、紹介元の診療機関、診療科ではほとんど検査も行われず、近年深部静脈血栓症が一般に認知されるようになったことから『足がむくんでいるからエコノミークラス症候群の可能性はある』といわれて受診してくる。

浮腫はいろいろな原因で生じ、内科的な疾患に起因する浮腫、薬剤が関係する浮腫、静脈渾流不全に起因する浮腫、リンパ渾流不全に起因するリンパ浮腫などの鑑別が必要になり、その背景疾患には、悪性疾患、凝固能異常、フレイルに伴う廃用性浮腫なども考慮する必要があり、下肢もしくは上肢の局所のみを診察することでは十分ではない。

外来初診時に、内服薬、既往歴、生活習慣など上記の鑑別診断に役立つ項目をしっかりと確認することから、診断は始まり、そのうえで超音波検査を行うことでかなりの絞り込みを行うことが可能となる。しかしながら、背景疾患までは超音波検査や採血検査では確定できないことから、診察・超音波検査の結果を踏まえて、その他の画像検索に進みつつ、治療を始めることになる。

日本静脈学会が中心となって『弾性ストッキング・圧迫療法コンダクター』の制度が構築されてきており、AMED 班（がんのリハビリテーション）が中心となり行われている『リンパ浮腫研修』、日本リンパ浮腫治療学会が中心となって『リンパ浮腫療法士』の認定など浮腫を呈する疾患に対する医師・メディカルスタッフの参加・取り組みは年々進んでおり、各医療機関に設置されたフットケア外来でも診療に取り組まれるようになり、従来トラッシュボックスの様相を呈していた『上肢・下肢の浮腫』について各医療機関での取り組みも進んできた。本講演では浮腫を呈する疾患における病態から診断・治療に至るまでの道筋を概説する。

血管浮腫のマネジメントと看護理論

～看護だから出来ること～

西九州大学看護学部看護学科 渡辺直子

浮腫の増悪により、疼痛などの身体的苦痛とボディイメージの混乱を招く。浮腫は、適切なアセスメントをもとに、根拠に基づいたケアを行うことで、症状コントロールが図れる現象である。

浮腫の保存的ケアとして、複合的治療がある。複合的治療は、専門的知識と技術をもとに、セラピストが①スキンケア②リンパドレナージュ③圧迫療法④運動療法⑤生活改善の5つの要素から患者の症状・全身状態・生活状況を加味し、医療者によるケアとセルフケアを組み合わせ、構築する。

浮腫のケアは複雑であるため、実施するには難易度が高い。特にセルフケアは、患者自身が、自己の生活の中で毎日行う必要がある。患者は、セルフケアの困難さに向き合いながら、長期に渡りケアを行わなければならない。患者は、育児・就業・高齢化など様々なライフサイクルの中で、浮腫のケアを継続することが、負担と感じる。また、見た目の変化による人間関係の縮小や着脱時の手間からくる社会活動の制限等、社会的心理的にも苦痛を感じやすい。

患者にとって、複合的治療は、「必要なことは理解できるが、できれば行いたくない」ケアとなっている。患者自身が、自己の浮腫と向き合い、ケアへの治療意欲を向上させるために、医療者は、生活の中でケアを行う患者の負担感や苦痛に共感し、患者生活の中で、今患者が必要としていることを捉えケアに取り入れることが重要である。看護は、「病いと共存する患者の生き方」を、多角的且つ俯瞰的視点でとらえ、QOLの向上と患者の自律へ支援できる。患者の自律とQOLを支える浮腫ケアが、看護にこそ求められている。

患者にとってQOLの向上は、単に「四肢が細くなれば解決できる」問題ではない。今回は、患者のQOLに視点をおいた、患者中心の視点での浮腫のマネジメントについて皆様と考えていきたい。

第2回血管看護研修コース

「B5 合併症の看護（心不全・糖尿病・緩和ケア）」

心不全緩和における浮腫看護の課題

東京情報大学看護学部看護学科 岡田彩子

心不全患者において浮腫は、疾患の進行や生活の質（Quality of life: QOL）に直結する症状のひとつであり、身体的・精神的苦痛を増幅させる要因となる（日本循環器学会・日本心不全学会、2021）。特に心不全のステージにおける進行期や終末期のある患者の浮腫は、治療的介入だけではその回復には限界があり、看護介入を合わせたケアが重要となる。

1980年代前半に米国で“Vascular nurse”という新たな specialty が誕生し、（1990年に、Society for vascular nursing に変更）が設立され、のちにその必要性から血管専門看護師（CVN: Certified Vascular Nurse）の育成が始まっている。血行動態の理解と血管管理に関する高度な知識と技術を持ち、浮腫のアセスメントおよび症状緩和において中心的役割を果たすことが期待される（Doyle, 2014 & 木村, 2020）。

本稿では、1)心不全患者における浮腫の病態とアセスメント、2) 緩和ケアにおける浮腫看護の現状、3) 臨床における実践と課題、4) 血管看護の視点からの推奨される介入（圧迫療法、ポジショニング、薬物管理との連携など）について概説する。また、浮腫の症状緩和を目的とした意思決定支援や、患者・家族の価値観に基づいた看護のあり方についても考察していく。

さらに、浮腫ケアにおけるチームアプローチの中で、日本における CVN のような看護職が多職種と連携しながら果たすべき役割について考察する。今後、心不全緩和における浮腫ケアの質向上のためには、心不全・循環器看護の専門家だけでなく、CVN と共同して、標準化されたアセスメント指標の開発や、看護介入のエビデンス蓄積の必要性和展望を述べていく。

第2回血管看護研修コース

「B4 症状の管理（浮腫・痛み・圧迫・血栓予防）」

がん性浮腫と看護の課題

広島大学病院 山口眞由美

がん患者の浮腫には、リンパ節を摘出したり放射線治療を受けたりすることで、リンパの循環が阻害されリンパ液がたまってむくむリンパ浮腫、化学療法による薬剤性浮腫、がんの進行に伴うリンパ節や静脈の圧排により生じる浮腫、筋力低下に伴う廃用性浮腫、低アルブミン血症・栄養障害による浮腫などがあり、原因や病態は多様である。

中でもリンパ浮腫はいったん発症すると改善し難く、慢性的な経過をたどる。放置すると次第に進行し非可逆性となり、軽度であれば多少の不便はあるものの日常生活を継続することができるが、重症化すると治療に難渋し、身体機能の低下だけでなく心理社会面への影響や日常生活上の困難をもたらし、QOL（生活の質）の低下につながる。

患者は、複合的治療（日常生活指導、スキンケア、圧迫療法、圧迫下の運動療法、手動的リンパドレナージ）と並行して、セルフケアの継続と習慣化が求められる。ケアの習慣化には、指導された方法から自分の生活に組み込んだ方法へと自前でカスタマイズしていくことが必要となる。その過程において、患者は効果的なセルフケアの方法を模索し、生活や心理面に折り合いをつけた症状マネジメントの努力を続けていかなければならない。

看護職は単に浮腫という症状に注目して、予防や症状軽減のためのセルフケアに関する知識と技術を一方的に提供するだけではケアの習慣化どころか、スキルの習得にも至らず、患者の行動変容は起こらない。患者主体のセルフマネジメントを支援するために、患者が毎日の生活の中で具体的に何を体験しているのかを詳細に知ろうとする姿勢が不可欠で、患者を理解するための対話が最も重要である。がん罹患や治療による患者の身体的苦痛や苦悩の軌跡とともに巡り、症状を抱える患者の体験を理解し、患者が見ている景色を想像し、寄り添いながら共にケアの方法を探る伴走者となることが浮腫看護において鍵となると考える。

症状マネジメントにおいて、浮腫という症状のみに捕らわれるのではなく、患者のがんの病態および浮腫の状態の的確なアセスメントに基づき、がんとともに生きる患者が持つ力を信じて引き出し、セルフケア能力や生活を再構築していく力を最大限に発揮できるよう最適なケアを見極め効果的な支援を検討し続けることが課題である。

第2回血管看護研修コース

「B1 ハンズオン 画像看護 問診・診察・病歴聴取」

浮腫における皮下エコーの活かし方

長崎血管外科クリニック 長田美雪

本邦におけるリンパ浮腫患者は、推定 10 万人と推測され、心不全患者は全国で約 120 万人、下肢静脈瘤は 1000 万人以上に患者が存在すると言われている。高齢患者の増加により、廃用性浮腫患者は、80 歳以上患者の 30%と言われており、約 450 万人が浮腫のリスクを抱えている。症状に応じた浮腫のケアの提供は、看護にとって喫緊の課題となっているが、基礎看護教育、現任教育においても、系統的な浮腫看護教育システムの構築には至っていない。

近年では、エコーを看護のツールとして活用する動きも活発となっており、現任教育・大学基礎教育の場においても、エコーの実践セミナーも多くなっている。血管看護の中で、エコーは血管を見るためのツールとして、エコーは聴診器同様、無侵襲なツールであり、看護師の血管病変の把握とケアへのアセスメント、及び患者教育に欠かせないものである。

浮腫看護にとっても、「患者の浮腫の原因を知る」「浮腫の現状を知る」ことは、アセスメントを行う上で非常に重要であり、フィジカルアセスメントによる情報に加え、画像、検査に対する知識が重要である。また、患者教育において、浮腫の情報を「見える化」することで、今まで自覚できなかった、患者自身が感じていても伝えきれなかった症状が明らかとなり、患者⇔医療者の相互関係を深め、治療へのアドヒアランスを向上することが出来る。

エコーは、浮腫看護にとって重要なツールであり、学ぶべき項目といえるが、現状において、看護におけるエコーを継続的に学ぶ機会は少ない。そこで、本研究会運営セミナーにおいて、第一回は、浮腫の特徴である、皮下エコーの技術講習を行い、浮腫を始めとする血管及びリンパ管に関連した疾患の看護アセスメント及び患者教育の向上への一助とする。

第 10 回日本血管看護研究会
大会長 渡辺直子 副会長 山口眞由美
実行委員 日野岡蘭子 溝部昌子
中山佳之 田中理子
金子由里



日本血管看護研究会
Japanese Society for Vascular Nursing

E-mail: vascular.nursing@gmail.com

URL: <http://jsvn.umin.jp>

